

下 落 合 み どり 幼 稚 園 月 報

2026 年 7・8 月 Vol. 69 No. 4

新宿区中落合 4-3-1 TEL3953-6112

「人はしるしを欲しがる」

園長 水野邦彦

これは今年三月まで、都内の公立小学校の副担任として働いていたときの話です。

一年生のAさんは、ご家庭の方針によりインターナショナル・プリスクールに通い、日常生活は英語、ご家庭は日本語という環境で育ちました。そして小学校に入学後、彼の「ことば」を取り巻く環境は大きく変化しました。Aさんは、ひらがなを読むことに苦勞し、日本語でのコミュニケーションも十分にできません。私が声をかけても「あー」や「うー」と応えるくらい。算数では、たし算やひき算を指折り数えて答えを出していましたが、文章題になると鉛筆が止まってしまう。それでも、問題が解けたり、書き取りの目標を達成したりしたときは、本当にうれしそうな表情を見せてくれました。生活面では、遊んでいる友達に自分から声をかけたり、周囲の呼びかけに応えたりすることが少なく、ボールが顔に当たったときも、その場にしゃがみ込んで泣くだけでした。何があったのか、どこが痛いのかを言葉で伝えることが難しかったのです。

私がこのエピソードを紹介するのは、小学校入学までに文字の読み書きや計算といった学習の基礎が必要と申し上げたいからではありません。むしろ、就学前の時期に、言葉によるコミュニケーションや人との関わりを十分に経験することが、子どもの

「心の育ち」にとって大切であることを改めてお伝えしたいからです。Aさんが通っていた園を選んだのは、保護者の方がわが子の将来を願っていたことであり、どの保護者も子どものためによいと思う道を選ぶうとします。しかしながら私たちは、その先にある本当に大切なものは何かを、折に触れて考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

新約聖書に「人はしるしを欲しがる」という言葉があります。私たちは目に見える成果や分かりやすい能力を求めがちです。しかし、幼い時期に育まれる安心感や信頼感、人と関わる喜び、自分の思いを言葉で伝える力は、すぐ目には見えないものです。

児童精神科医の佐々木正美氏は、こうした土台を伴わずに得られた自信を「薄っぺらな自尊心」と表現しました。知識や技能はもちろん大切ですが、それらを支える「心の土台」がなければ、困難に直面したときに心が大きく揺らいでしまうことがあります。そして、自信のよりどころを失うと、その不安を自分で受け止めることができず、ときには他者を傷つけたり、自分自身を否定する形で表れたりすることもあるのです。

幼児期に十分に愛され、人と関わる喜びを知り、自分らしく育つことは、その後の人生を支える大切な力に必ずなります。子どもにとって本当に必要な成長の要素は何か。その問いに向き合うとき、私たちは改めて「心の育ち」の大切さに気づかされるように思います。